

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 (22)

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— XII —

総 集 編

1982・3

鹿児島県教育委員会

## 序 文

九州縦貫自動車道（鹿児島線）の建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査については、昭和43年4月1日同自動車道の加治木～鹿児島間の工事施行が決定されたので、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」（昭和42年9月30日）に基づき、日本道路公団の委託により本県教育委員会が、昭和43年度に分布調査を行い、昭和46年8月20日発掘調査に着手しました。

その後、加治木～吉松間の路線計画が決定されたので、昭和47年度にこの区間の分布調査を実施し、その結果に基づき日本道路公団と県教育委員会が協議し、路線の一部変更によって遺跡の保存を図ることになりました。

なお、この区間の発掘調査は、昭和49年3月15日から昭和55年2月21日まで実施しました。

昭和46年8月から始まりました九州縦貫自動車道関係の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、昭和55年2月まで、およそ9年の歳月をかけて38遺跡、面積約186,000㎡を調査し、数々の貴重な発見をしました。遺物がばく大な量であったので、整理に多くの日時を要しましたが、ようやく本年度をもって調査事業を終了することになりました。

これまで刊行してきました発掘調査報告書を学術資料として、また、文化財愛護思想の普及のために活用していただければ幸いです。

10有余年の長きにわたり御指導と御協力をいただきました文化庁、日本道路公団、関係各市町教育委員会、関係者各位に衷心から謝意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

## 例 言

1. 本書は、九州縦貫自動車道（鹿兒島線）建設に伴い、日本道路公団の受託事業として、鹿兒島県教育委員会が発掘調査したすべての遺跡の総集編である。
2. 遺跡番号（例・I 堀之内B遺跡）、報告書番号（例・鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書(21)堀之内B遺跡）は既刊報告書番号と同一である。
3. 本書は、遺跡を概要としてまとめるとともに、各遺跡出土の遺構・遺物を各時代順に配列し、ほかに科学処理、発掘状況、土層等も掲載し、遺跡の理解に役立つよう努めた。
4. 出土品の一部は、県立博物館（考古資料館）に公開展示するとともに、文化課収蔵庫に保管している。
5. 図版の縮尺は、集成のため必ずしも同一ではない。



土層断面（ポールは2m）加栗山遺跡



緑釉陶器（「伴家」と針書きがある）小瀬戸遺跡

# 目 次

序 文

例 言

調査の経過..... 2

層 位

土層柱状図..... 8

地層の局所的断層について.....10

放射性炭素 (14C) 年代測定について.....11

各遺跡の概要

1. 堀之内B遺跡.....12	20. 柵場遺跡.....41
2. 木場A遺跡.....13	21. 西免遺跡.....42
3. 木場B遺跡.....17	22. 中尾遺跡.....43
4. 木場C遺跡.....18	23. 入道遺跡.....44
5. 山崎A遺跡.....19	24. 南十三塚遺跡.....45
6. 山崎B遺跡.....20	25. 東原遺跡.....46
7. 山崎C遺跡.....25	26. 桑ノ丸遺跡.....47
8. 中尾田遺跡.....26	27. 三代寺遺跡.....49
9. 木佐貫原遺跡.....30	28. 建馬場遺跡.....51
10. 石峰遺跡.....31	29. 松木田遺跡.....52
11. 柳ヶ迫遺跡.....33	30. 小瀬戸遺跡.....53
12. 長ヶ原遺跡.....34	31. 小山遺跡.....55
13. 松木原遺跡.....35	32. 谷ノ口遺跡.....57
14. 葛根塚遺跡.....35	33. 上城城跡.....58
15. セツ次遺跡.....36	34. 宮後遺跡.....59
16. 松ヶ迫遺跡.....37	35. 木ノ迫遺跡.....60
17. 木屋原遺跡.....38	36. 加治屋園遺跡.....61
18. 山神遺跡.....39	37. 加栗山遺跡.....63
19. 曲迫遺跡.....40	38. 神ノ木山遺跡.....70

各時代の概要

旧石器時代.....71	古墳時代..... 104
縄文時代.....77	歴史時代..... 106
弥生時代..... 102	

集石遺構の科学処理による取り上げと保存..... 121

あとがき..... 126

## 調査の経過

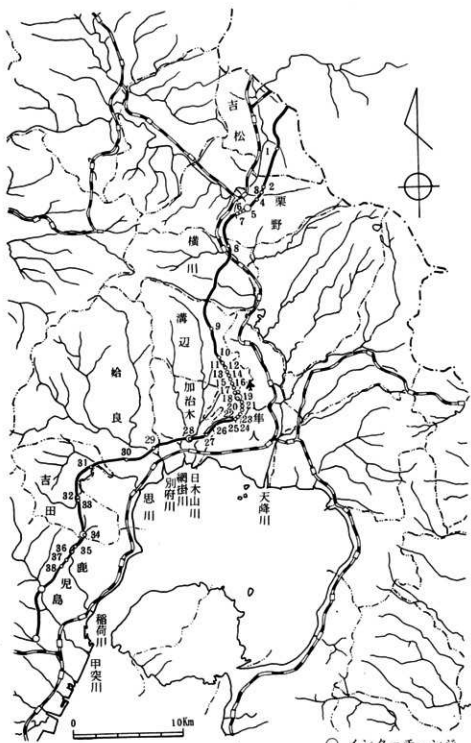
九州縦貫自動車道の建設事業が始まったのは、昭和43年で、本県は、加治木～鹿児島間の工事施工命令が、昭和43年4月1日出されている。県教育委員会としてはこれに対処するために、社会教育課文化係（当時）を中心に、関係者の協力を得て、昭和43年12月から昭和44年1月まで、九州縦貫自動車道建設に判う埋蔵文化財分布調査を実施し、この調査結果に基づいて、鹿児島～加治木間の路線が決定された。

その後、鹿児島線（加治木～吉田間）の工事計画が具体化するに及んで、県教育委員会は、昭和46年1月に再度、県文化財専門委員（当時）河口貞徳氏の指導を得て、日本道路公団福岡支社鹿児島工事事務所と路線内の分布調査を実施した。この結果に基づき、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」第4項により、日本道路公団と協議し、昭和46年度において、始良町小瀬戸遺跡ほか6か所の発掘調査と中世の山城1か所の調査を行うことになった。そのうち、小瀬戸遺跡・小山遺跡は、県文化財専門委員の河口貞徳氏を調査主任とした調査団が発掘調査に当たり、残りの遺跡は、県社会教育課が実施した。

その後、日本道路公団は、昭和47年2月23日に覚書に基づき、鹿児島線（吉松～加治木間）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対し、県文化室は、昭和47年8月2日～10日、同月18日から26日までの間に、延長38キロメートル、市2キロメートル（満辺～加治木間は予定路線内）にわたって分布調査を実施した。

その結果に基づいて、文化室は路線の決定については、埋蔵文化財の保護のうえから十分配慮されることを要望した。これに対して、日本道路公団は、満辺～加治木間は、すでに昭和47年5月17日に路線を発表した後だった関係上、路線内の各遺跡はすべて記録保存をすることで県教育委員会と協議した。さらに、これらの遺跡について再度確認するために、県文化財専門委員の河口貞徳氏、同池水寛治氏の指導を得て分布調査を実施し、発掘調査前の取扱いに慎重を期した。また、吉松～満辺間の埋蔵文化財包蔵地については、昭和47年度に実施した分布調査の結果によって協議を進めてきたが、さらに、昭和49年1月～2月、河口貞徳氏の指導を得て再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて、遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議の結果、保存する遺跡1か所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10か所（横川町中尾田遺跡他）が決定した。

以後、発掘調査は関係者各方面の協力を得て継続され、昭和54年2月をもって38か所の遺跡すべてが調査終了し、そして、昭和56年度の整理報告書作成の完了で九州縦貫自動車道関係発掘調査事業は終了した。発掘調査期間10ヶ年、調査面積 206,300㎡に及んだ。



遺跡名

1. 畑之内B
2. 木場場 A
3. 木場場 B
4. 木場場 C
5. 山崎 A
6. 山崎 B
7. 山崎 C
8. 中尾田
9. 木佐貫原
10. 石ヶ峰
11. 柳ヶ追
12. 長ヶ原
13. 松ヶ木
14. 葛ヶ原
15. 七ツヶ原
16. 松ヶ木
17. 山木屋
18. 山曲
19. 山曲
20. 杉場
21. 西中
22. 中入
23. 南十三塚
24. 南十三塚
25. 東原
26. 桑ノ丸
27. 桑ノ代
28. 三馬
29. 建松
30. 馬木
31. 小戸
32. 小戸
33. 小戸
34. 小戸
35. 小戸
36. 小戸
37. 小戸
38. 小戸

○ インターチェンジ      ○ 遺跡

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表  
(昭和46年～昭和55年2月)

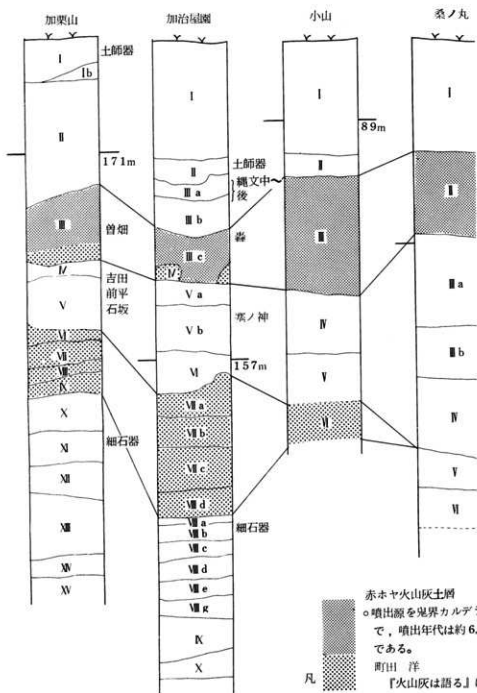
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	調査員	文 献
1	堀之内B	吉松町川添	54. 9. 10 54. 9. 27	500	立 神 青 崎	県埋蔵文化財発掘調査報告書20 1981. 3
2	木場 A	栗野町木場	一次 53. 12. 11 54. 3. 31 二次 54. 8. 28 55. 2. 21	14,000	牛ノ浜 新東 宮田 池畑 長野	県埋蔵文化財発掘調査報告書21 1982. 3
3	木場 B	*	54. 8. 28 54. 11. 24	4,500	新東 出島 井中	県埋蔵文化財発掘調査報告書21 1982. 3
4	木場 C	*	53. 11. 27 54. 1. 13	2,700	長野 出口	県埋蔵文化財発掘調査報告書17 1981. 3
5	山崎 A	栗野町山崎	52. 12. 13 53. 3. 26	6,000	吉永 牛ノ浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書17 1981. 3
6	山崎 B	*	53. 4. 10 54. 10. 12	21,800	牛ノ浜 西田 中島 出口	県埋蔵文化財発掘調査報告書18 1981. 3
7	山崎 C	*	52. 12. 13 53. 3. 26	3,000	中村 西田	県埋蔵文化財発掘調査報告書17 1981. 3
8	中尾田 (山城)	横川町中野	53. 5. 15 54. 10. 6	9,800	新東 中島 井ノ上	県埋蔵文化財発掘調査報告書15 1981. 3
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	51. 2. 6 52. 11. 31	17,000	吉永 牛ノ浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書11 1979. 2
10	石 峰	溝辺町麓	一次 50. 10. 2 50. 12. 19 二次 51. 11. 24 53. 5. 15	20,000	河出 西田 戸崎 青池	県埋蔵文化財発掘調査報告書12 1980. 3



11	柳ヶ迫	溝辺町麓	51. 3. 22 51. 5. 17	700	長西	野田	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
12	長ヶ原	*	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新中	東村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
13	松木原	*	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新池中	東畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
14	葛根塚	*	50. 9. 8 50. 9. 26	790	新池中	東畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
15	七ッ次	*	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥港中	栄畑村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
16	松ヶ迫	*	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥中	栄村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
17	木屋原	*	50. 4. 7 51. 3. 31	4,520	弥立	栄神	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
18	山神	*	49. 6. 13 50. 4. 28	6,950	平牛吉	田浜永	県埋蔵文化財発掘調査報告書7 1977. 2
19	曲迫	*	50. 1. 27 50. 3. 31	4,000	諏弥	訪栄	県埋蔵文化財発掘調査報告書7 1977. 2
20	栢場	*	49. 6. 5 50. 3. 27	2,500	平牛吉	田浜永	県埋蔵文化財発掘調査報告書7 1977. 2
21	西免	隼人町西光寺	49. 5. 25 50. 2. 8	1,500	平吉	田永	県埋蔵文化財発掘調査報告書7 1977. 2
22	中尾	*	49. 9. 25 50. 2. 10	2,500	出吉	口永	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
23	入道	*	49. 8. 5 50. 3. 31	1,720	出吉	口永	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2

24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 49. 9. 20	600	出 口 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
25	東 原	*	49. 9. 17 50. 1. 24	8,700	諏 訪 弥 柴 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書10 1978. 2
26	桑ノ丸	*	49. 8. 1 50. 4. 25	8,750	新 東 牛ノ 浜 中 村	県埋蔵文化財発掘調査報告書7) 1977. 2
27	三代寺	加 治 木 町 日 木 山	49. 3. 15 49. 7. 31	2,300	河 口 新 東 弥 柴 牛ノ 浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書11 1979. 2
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 46. 12. 12	180	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書19 1982. 3
29	松木田	始良町鍋倉	46. 12. 12 46. 12. 15	42	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書19 1982. 3
30	小瀬戸	始良町西餅田	46. 8. 20 46. 11. 2	3,050	河 口 戸 崎 立 神 尾ノ 上 中 有 間 元	県埋蔵文化財発掘調査報告書19 1982. 3
31	小 山	吉 田 町 東 佐 多 浦	46. 11. 6 47. 2. 10	1,050	河 口 戸 崎 立 神 尾ノ 上 中 有 間 元	県埋蔵文化財発掘調査報告書20 1982. 3
32	谷 口	吉田町本城	46. 11. 10 46. 11. 18	124	盛 園 立 神	県埋蔵文化財発掘調査報告書20 1982. 3
33	上城城跡	吉田町本城	47. 1. 14 47. 1. 18	20,000 (現地踏査)	盛 園 田 野 辺	県埋蔵文化財発掘調査報告書20 1982. 3
34	宮 後	吉田町宮ノ浦	46. 11. 10 46. 11. 18	44	盛 園 田 野 辺	県埋蔵文化財発掘調査報告書20 1982. 3

35	木の迫	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 50. 12. 11	300	立神 牛ノ 吉浜 永	県埋蔵文化財発掘調査報告書04 1981. 3
36	加治屋園	*	50. 11. 26 51. 7. 31	1,200	弥栄 新東 長野 中村	県埋蔵文化財発掘調査報告書04 1981. 3
37	加栗山	*	50. 2. 15 51. 10. 16	30,600	戸崎 青崎 立神 吉永 牛ノ 浜	県埋蔵文化財発掘調査報告書06 1981. 3
38	神ノ木山	*	50. 5. 12 50. 5. 15	20	戸崎 青崎	県埋蔵文化財発掘調査報告書06 1981. 3



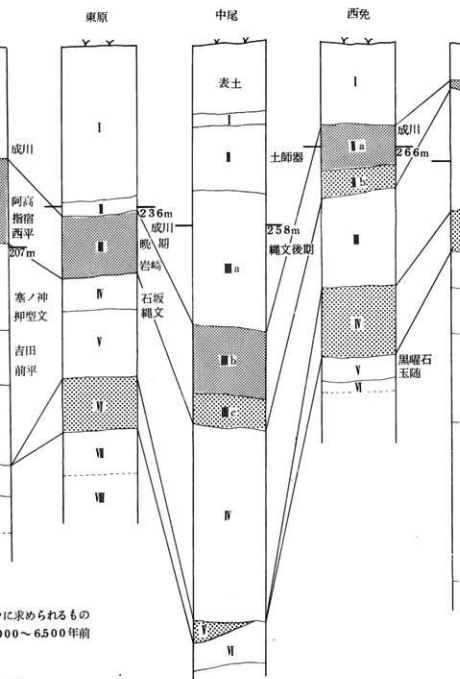
赤まや火山灰土層  
 ○噴出源を鬼界カルデラ  
 で、噴出年代は約6,  
 である。

町田 洋  
 『火山灰は語る』

凡

例

桜島火山灰土層  
 (薩摩)  
 ○噴出源を桜島に求め  
 噴出年代は約9,000。  
 福山博之  
 『大隈半島に分布  
 灰土壌の<sup>14</sup>C年

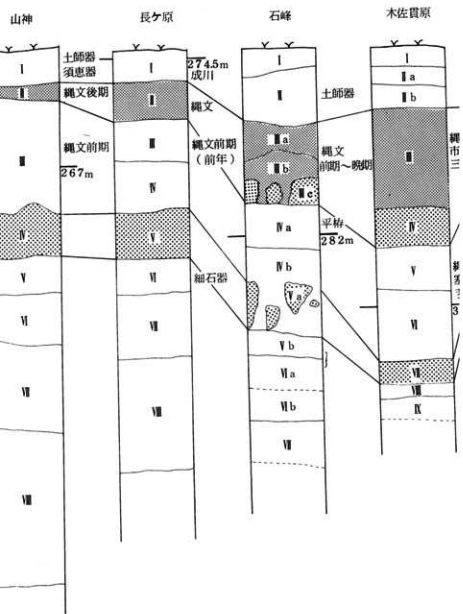


に求められるもの  
10000～6500年前

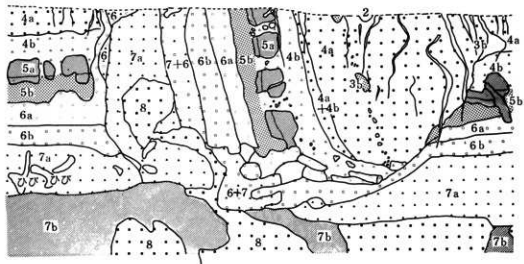
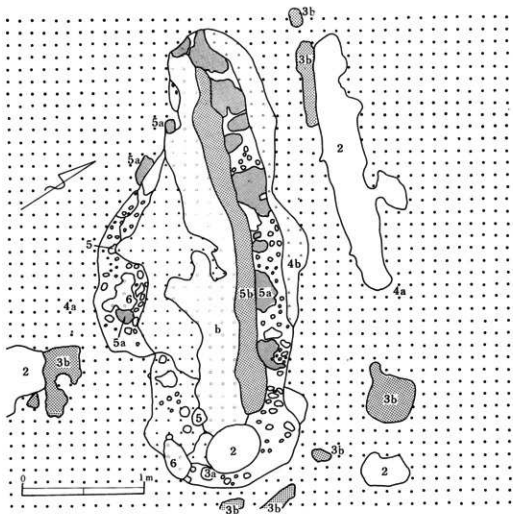
による

れるもので、  
10,000年前である。

る極島火山起部、火山  
代」による。









## 地層の局所的断層について

九州縦貫自動車道関係の遺跡の調査において、溝辺町・横川町・栗野町などの霧島山地西方の給良郡地域内において、地層に局所的な断層が広く分布することが確認された。

断層部分の断面を観察すると、整合の状態であった水平な層が、この部分では垂直に転位して縦に並んだ形となり、断面の形は下方が半円形ないしは弧状を呈するのが一般的である。

断層が発生した時期は、赤ホヤ火山灰土が堆積したあとであるという御教示を鹿児島大学教育学部（当時）石川秀雄教授より受けた。

## 放射性炭素（<sup>14</sup>C）年代測定について

出土した遺物の年代決定は、出土した土器の形式・系統で判断する他、土層の上下関係等で遺物の新旧関係を決定する。

これらの方法の他、近年では自然科学の土壌分析、土中に含まれていた木炭や貝殻等の放射性炭素の測定などで年代を推定する方法も利用するようになり、九州縦貫自動車道関係の遺跡の調査でも<sup>14</sup>Cによる年代測定を行なった。それらは、一部出土遺物の年代と符合しないものもあるが、絶対年代の目安となるので、次に示すこととした。

遺跡名	年	代	資料	層	備考
木場 A <sub>1</sub>	8,860 ± 210 Y.B.P	(8,610 ± 125)	炉穴内炭化物	IV	N -3539
中尾田	8,530 ± 125 Y.B.P	(8,280 ± 120)	炉穴内炭化物	IV	N -3929
◦	8,430 ± 125 Y.B.P	(8,190 ± 120)	炉穴内炭化物	IV	N -3983
◦	1,450 ± 65 Y.B.P	(1,410 ± 60)	炉穴内炭化物	III	N -3940
木佐貫原	1,080 ± 80 Y.B.P	(1,050 ± 75)	炉穴内炭化物	III	N -3376
◦	1,750 ± 65 Y.B.P	(1,700 ± 65)	炉穴内炭化物	III	N -3377
石 峰	5,720 ± 130 Y.B.P	( )	住居址内炭化物	IV a	GaK -6859
◦	2,780 ± 85 Y.B.P	(2,700 ± 80)	土層内炭化物	IV b	N -3101
◦	3,050 ± 95 Y.B.P	(2,960 ± 90)	土層内炭化物	III a	N -3100
◦	7,910 ± 115 Y.B.P	(7,680 ± 110)	土層内炭化物	IV a	N -3102
◦	9,410 ± 140 Y.B.P	(9,150 ± 135)	Pit 内炭化物	IV b	N -3099
中 尾	1,490 ± 90 Y.B.P	( )	Pit 内炭化物	III a	GaK -5801
◦	1,330 ± 80 Y.B.P	( )	Pit 内炭化物	III a	GaK -5802
◦	590 ± 90 Y.B.P	( )	焼 土	III a	GaK -5800
加治屋園	7,550 ± 130 Y.B.P	(7,330 ± 125)	集石内炭化物	V a	N -3924
◦	5,020 ± 105 Y.B.P	(4,880 ± 100)	集石内炭化物	III c	N -3925
加 栗 山	9,150 ± 160 Y.B.P	(8,880 ± 150)	集石内炭化物	V	N -3926
◦	9,390 ± 130 Y.B.P	(9,110 ± 130)	土域内炭化物	V	N -3927
◦	8,890 ± 130 Y.B.P	(8,630 ± 125)	土域内炭化物	V	N -3928

各遺跡の概要

---

## 1. 堀ノ内遺跡

1. 所在地 始良郡吉松町川添堀ノ内

### 2. 環境

遺跡は、吉松町街地より南へ約3km下り、国道267号線より東へ1.5kmほどの標高約400mの畑地にある。当地は西へ向いた傾斜面となり、面積の狭い段々畑が作られている。当遺跡から西方に山あいをぬって流れる川内川があり、河岸岸丘が形成された地点に、地下式板積石室を主体とした永岡古墳が位置する。

### 3. 層位

I層は耕作土、II層は黒褐色火山灰土層で、土師器の遺物包含層である。III a層は黄色土層(赤ホヤ層)、III b層はバミス層(不規則でブロック状を呈す)、IV層は灰青色粘土層、V層は暗褐色粘土層、VI層は暗黄褐色粘土層、VII層は黄褐色粘土層(粘質が強く、安山岩が多数含まれ、岩石層となる)、VIIIはシラス層。

### 4. 遺物

発掘対象地は、畑地の縁辺部で、しかも傾斜地の約500㎡と狭い面積の調査であった。遺物としては、土師器杯・甕・内黒土師器・須恵器等の小破片が出土することとなった。

以上、本遺跡は台地縁辺部の約500㎡を調査したが、一部は攪乱を受け、小規模な調査に終わった。遺物も奈良時代以降のものであったが、主体部は調査区以外の東に延びることは確実に、その意味では、遺跡は保存された形となった。



遺物出土状態

## 2. 木場A・木場A-2遺跡

### 1. 位置

木場A遺跡は、始良郡栗野町木場外堀、木場A-2遺跡は、木場本城に所在する。木場A遺跡は国鉄栗野駅の北東約1300mの地点にあり、木場A-2遺跡はA遺跡の東約700mにある。

### 2. 環境

遺跡の所在する栗野町は、鹿児島市街地より北東約44kmの鹿児島県の北部に位置し、東は霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と境を接し、霧島山塊等の火山灰で地形が複雑である。また、川内川が吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地を作っている。

A遺跡は、川内川南東部の松尾城より約600mの栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約260mの台地で川内川よりの比高は約80mである。A-2遺跡は、A遺跡の東700mのところであり、栗野岳の裾野が緩峻の谷にむかう傾斜地を削平した桑畑にある。

### 3. 層位

I層-V層に分類された。I層は耕作土である。II層は黒色軟質土であるが、削平されて部分的にしか存在しない。土師器の散布がみられた。III a層は黄褐色土層で縄文時代前期～後期にかけての遺物が出土するが量的には少ない。III b層は黄褐色バミス層で無遺物層である。IV層は黒褐色硬質土層で上部において縄文時代前期の土器と石器が、上部から中部において、縄文時代早期の土器と石器が出土した。IV層下部に桜島起源と想定される黄褐色バミス層が、ブロック状に存在した。V層は黄褐色粘質土層で、IV層最下からV層最上部にかけて細石器の出土をみた。VI層は暗茶褐色を呈した粘質土層で、VI層下部からVII層最上部にかけて旧石器時代の遺物が出土した。VII層は黄シラスで最上部に石器がみられたが、それ以下は無遺物層であり基盤をなすシラスの上にある。A-2遺跡はVI層まではほぼ同様であるが、VII層は暗黄褐色を呈した火山灰層で尖頭器が出土した。VIII層は茶褐色を呈する火山灰層でやはり尖頭器が出土した。IX層はA遺跡のVII層に対比される黄シラスである。

### 4. 遺構

遺構は道路跡・溝状遺構・土壇・集石が検出された。道路跡は表層を除去したIII a層上面にポットホールを形成するもので、遺物として須恵器・土師器から陶器類まで遺物がみられ、中世から近代まで続いた古道であろう。溝状遺構は2本検出され、1号溝からは土師器の皿が出土している。土壇は3基検出され、埋土は全てII層の黒色火山灰土である。土壇1からは、3枚の土師器皿が重なるようにして出土した。集石は縄文時代のIV層に拳大の礫を集めたものが8基検出され、VII層下部には旧石器時代の集石が4基検出された。旧石器時代の集石には周辺に炭化物が確認されたものも検出された。性格は不明である。A-2遺跡では遺構は検出できなかった。

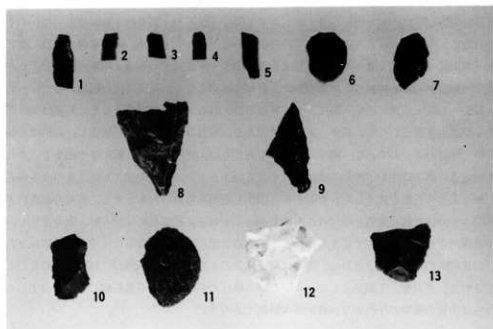
### 5. 遺物

遺物は旧石器時代の石器・縄文時代土器・石器・土師器・須恵器・陶器・青磁等が出土した。

旧石器時代の石器にはナイフ形石器・加工のある剥片・細石刃・調整剥片等が出土した。ナイフ形石器はシラス直上にあり古いタイプの石器である。縄文式土器は、連点鋸歯文土器・桑ノ丸式・吉田式・前平式・塞ノ神式・押型文・手向山式・阿高式・山水式・市米式等の出土をみたが、平椀式から塞ノ神式への中間形態の土器が主体をなした。縄文時代の石器としては、石鎌・石斧・石匙・石錐・石槍・剥片・つまみ形石器・磨石・石皿等が出土した。石鎌は180点出土し形態も多種にあたる。石斧は磨製石斧である。石匙は縦型と横型が出土し、石槍は尖頭状石器と呼ばれるものである。剥片には加工のあるもの、使用痕のある剥片等が出土し、また、北九州地方の縄文時代早・前期の遺跡でみられる両面からノッチ状の加工を施すつまみ形石器や抉り入りの石器が出土した。磨石も多く出土し凹石等もみられる。また、石皿の表裏に多数の凹みをつけた蜂ノ巣石と呼ばれるものも出土している。土師器には甕・杯・皿が出土し、皿は遺構内より3枚重なって出土している。須恵器は細片である。陶器には備前焼の攪鉢があり、16世紀頃の年代が推定される。青磁は竜泉窯系のもので白磁と同様15～16世紀頃のものと推定される。その他、土製品として、ふいご口の破片や石製品の滑石製石鍋の破片が出土した。これらは中世の遺物の年代より16世紀頃の時期であろう。

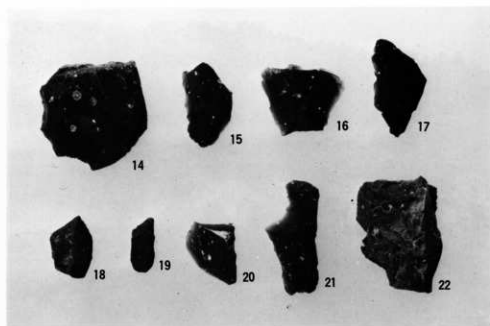


木場 A - 2 遺跡 近景



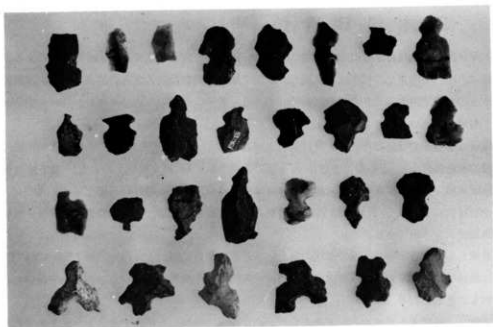
旧石器時代石器

1～5 細石刃 6・7 調整製片 8・9 ナイフ形石器 10～13 スクレイバー



旧石器時代石器

14～22 剥片



縄文時代石器・つまみ形石器・抉り入り石器



蜂ノ巣石



土師器皿

### 3. 木場 B 遺跡

木場B遺跡は始良郡栗野町木場内堀に所在し、国鉄栗野駅より北東約1100mの地点にある。遺跡は、川内川南東部の松尾城より約500m南で栗野岳の裾野にあたる台地上にある。標高約250mの台地で川内川よりの比高は約80mである。遺跡は畑地のため削平され、牧草・桑畑として利用されている。

地層はⅧ層まで確認した。Ⅰa層は褐色土層(白色パミスの粒子を含む)、Ⅰbは黒褐色層、Ⅱ層は黒色軟質土層(土師器包含層)、Ⅲa層は赤褐色軟質層(縄文晩期土器包含)、Ⅲb層は黄褐色硬質層、Ⅲcは黄褐色パミス層、Ⅳa層は黒色粘質層、Ⅳb層は軽石層(小指先大のパミスが断続的に広がる)、Ⅳc層は黒色粘質層、Ⅴ層は褐色粘質層、Ⅵ層は黒褐色粘質層、Ⅶ層は黄褐色シラス層である。

遺構として、Ⅲa層直上面で溝状の落ち込みがみられた。幅約1m内外、深さ30~40cmで断面は鍋底状を呈している。成川式土器の破片や陶磁器を少量包含していた。古代~中世にかけてのものと思われる。

遺物は、成川式土器を主として出土した。小片が多く散乱した状態で出土し、まとまったものは少ない。土師器もかなり出土した。層位的にはⅡ層からⅢa層上面に当り、古墳時代の成川式土器と混合している。坏は糸切り底を主とする。また、青磁や白磁の破片もみられた。いずれも13世紀前後のものである。その他、須恵器や備前焼の破片も出土している。

縄文式土器は、市来式や黒川式が数点出土した。また、これらに伴う石鏝や刺片もみられ、近辺に後期から晩期にかけての遺跡が存在が予想される。早・前期の土器は全く発見されなかった。



発掘調査風景



#### 4. 木場 C 遺跡

木場C遺跡は、栗野町木場字上原に位置する標高231mの所にある。調査面積は約800㎡で、縄文時代・古墳時代・平安時代・室町～安土桃山時代の4期にわたる痕跡を見出した。

縄文時代の生活痕跡として集石遺構がある。これは50cm四方の中に人頭大あるいはこぶし大の円礫・角礫が集中しているもので、検出された層序あるいは遺跡の類例から早期のものと思われる。遺物は中期末～後期前半の南福寺式土器・市来式土器・石鏃などが出ている。

古墳時代の土器は少量で、前期の甕と、後期の高坏・鉢・甕がある。

平安時代のものには、土師器の坏・皿・埴・甕・内黒土師器の埴・須恵器の甕・大陸製の青磁碗と白磁碗がある。建物等は検出されていない。

室町～安土桃山時代のものには、土師器の坏・鉢には内面にスラグの付着したものがある。この時代の性格は、山城関係の遺跡であることが考えられる。

当遺跡は西側にのびる台地の基部にあり、台地西側は相当に広い。したがって、この先端部の調査がされなければ、この遺跡の性格づけは十分にされ得ない。



木 場 C 遺 跡

## 5. 山崎 A 遺跡

山崎 A 遺跡は、鹿児島県姶良郡栗野町米永牛瀬戸に所在し、国鉄栗野駅の南西約 750 m の標高約 210～220 m のところにある。

遺跡は、霧島火山群の分峯栗野岳の裾野の末端部にあたり、複雑な地形の谷頭の様相を呈した迫状の所にある。周囲は台地末端部のため階段状の畑で、桑が植えつけられている。周辺は、川内川によって形成された盆地状の沖積地に水田地帯が広がっている。

土層は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰土、Ⅲ層がⅢ a 層の暗赤褐色軟質土とⅢ b 層の赤褐色軟質土、Ⅳ層が黄褐色パミスである。Ⅲ層とⅣ層は鬼界カルデラ噴出の赤ホヤに比定されるものである。Ⅴ層はⅤ a 層の青灰色土、Ⅴ b 層の黄褐色砂質土、Ⅴ c 層の乳褐色砂質土、Ⅴ d 層の灰褐色砂質土である。Ⅵ層がⅥ a・d・f 層の黒褐色砂質土、Ⅵ b 層の茶褐色粘質土、Ⅵ c・e の黄褐色砂質土である。Ⅶ層が茶褐色粘質土、Ⅷ層が黄褐色硬質土、Ⅸ層がシラス土である。Ⅷ層は桜島の噴出源のパミスに比定されるものである。

遺構は、Ⅲ層上面に 2×3 間の建物跡が 2 棟と、谷に沿った数本の古道跡と考えられるものが検出された。遺物から奈良～平安時代に属すると考えられる。建物跡の pit は坪事業が行なわれており、又、1 棟の pit のうち 4 個の pit の最深部に同一個体と考えられる内黒土師器の小片が埋設されていた。Ⅴ層からは、竈に利用されたと考えられる集石が 1 基検出された。

遺物は、Ⅱ層から土師器・内黒土師器・須恵器・青磁・古銭等が、Ⅱ層下部からⅢ層上部にかけて土師器・須恵器・成川式の変形土器・埴・高坏等が散布状態で出土した。Ⅲ層からは縄文時代後期に属する土器片が、Ⅴ層からは縄文時代早～前期に属する貝殻文系統の土器片がそれぞれ少量出土した。Ⅱ層出土の青磁の中には、熊本県城南町板野の 1410 年刻銘の石塔から出土したものと同タイプのものがある。石器では、石斧・敲石がⅢ層から、打製石鏃がⅡ・Ⅲ・Ⅴ層から出土した。<sup>(註)</sup>

(註) 九州歴史資料館の亀井明德氏の御教示による。



山崎 A 遺跡

## 6. 山崎 B 遺跡

### 1. 位置

山崎 B 遺跡は、始良郡栗野町木場字牛瀬戸に所在する。この地は国鉄栗野駅の南西約 750 m の地点にあり、現在は栗野インターチェンジの料金徴収所の付近である。

### 2. 環境

遺跡の所在する栗野町は、鹿児島市街地より北東約 44 km の鹿児島県の北部に位置し、東は霧島火山群の一分峯栗野岳が宮崎県えびの市と、南は牧園・横川両町と境を接し、火山灰土で地形が複雑である。また、川内川が吉松町境の峡谷をうがって栗野町の中央部に沖積地の盆地を作っている。

遺跡は、栗野岳の裾野から広がる丘陵に川内川の氾濫による砂礫層が堆積し、河岸段丘を形成しているテラス状台地上にあり、畑地として利用されていた。北側は川内川と水田を望む地であり、標高約 210 m の台地であり、川内川からの比高は約 30 m である。

### 3. 層位

I～IX 層に分類された。I 層は耕作土で、II 層は黒褐色軟質土である。II 層は部分的にしか存在しない。遺物は須恵器・土師器・陶器・青磁・白磁が出土している。遺構は溝状遺構・堀が検出された。III 層は黄褐色土層で縄文時代前期～晩期にわたる遺物を包含するが出土量は少ない。III 層下部はバミス層があり無遺物層である。IV a 層は青灰色を呈し、縄文前期の遺物が出土した。IV b 層は乳褐色を呈し、縄文時代前期の遺物が出土した。V 層は黒褐色硬質土層で縄文時代早期の土器と石器が出土した。VI 層は黄褐色バミス層で無遺物層である。VII 層は水成砂層で 1～2 m にわたり互層をなして堆積している。VIII 層は砂礫層で細石器が出土している。石器は磨滅したものが多く、川内川の氾濫により運びこまれたものと思われる。

### 4. 遺構

遺構は、堀・溝状遺構・掘立柱建物跡・集石・土壇が検出された。堀は 3 本検出され、いずれも南北に平行して築かれたものである。溝状遺構は西から堀へむかって傾斜している。遺物は土師器・須恵器・陶磁器が出土した。掘立柱建物跡は、7 棟検出された。堀より東に築かれ、溝 1 と溝 3 の間に無数の柱穴が集中し、5 棟が確認され、また、その南の方にも 2 棟検出された。その他の地域にも無数の柱穴が存在し、掘立柱建物がその他にも築かれたと想定されるが確認されたものは 7 棟であった。2 間×5 間、2 間×4 間、2 間×3 間、2 間×2 間を測った。縄文時代早・前期の集石遺構は、土器出土の状況と同じように分布し 17 基を確認した。検出状況は IV a～V 層にみられ、一か所に集中しているものから、散乱しているものと形態はまちまちである。大半が拳大の安山岩の角礫や円礫の自然石からなる。土壇は VI 層に V 層が埋土されているもので 6 基検出された。長径約 100 cm、短径 60～70 cm、深さ約 60 cm の方形状を呈する土壇である。埋土中に少量の黒曜石片と細片の吉田式土器片が検出されたが、性格などは不明である。

## 5. 遺物

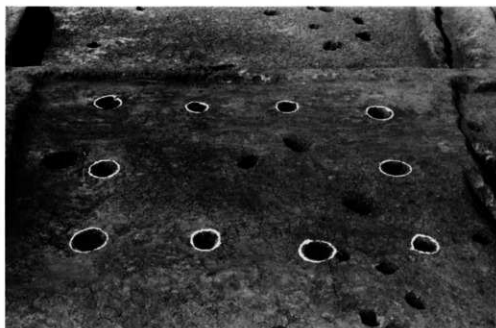
遺物として旧石器時代は細石刃・細石刃核・尖頭器・剥片等が砂礫層の中で出土し、石器は磨滅していることから氾濫による周辺遺跡からの移動と思われる。縄文時代の遺物は早期から晩期まで各時期にわたり出土した。吉田式土器・前平式土器・平椀式土器・寒ノ神A式土器・寒ノ神B式土器・押型文土器・手向山式土器・政所式土器・木屋原式土器・轟式土器・阿高式土器・指宿式土器・市来式土器・黒色研磨土器等多種多様にわたって出土したが、破片が多く復元できたものは、寒ノ神A式土器と木屋原式土器・前平式土器であった。石器は、石鏃・石斧・石匙・スクレイパー・剥片・すり石等が出土した。弥生時代・古墳時代の遺物は少なく破片が小さい。中世の遺物には、土師器・内黒土師器・須恵器・瓦質土器・磁器・陶器・土製品・石製品・古銭が出土している。土師器には、皿・坏・埴・蓋・こしき・甕・浅鉢・すり鉢があり、内黒土師器には、坏・埴・甕がある。須恵器は坏蓋・坏身・坏・壺・こね鉢・提瓶・甕があり、瓦質土器には甕・すり鉢がある。磁器には白磁・青磁・染付(青花)・青白磁がある。陶器には天目茶碗と備前焼とがある。



遺 跡 全 景



堀 出 土 状 況



掘立柱建物跡(2間×3間)



木屋原式土器出土状態



前平式



蓋ノ神式土器



木屋原式土器

## 7. 山崎 C 遺跡

山崎C遺跡は、始良郡栗野町大字米永字牛瀬戸に所在する。鹿児島空港の北方約16km、国鉄栗野駅より南西約750mに位置する。遺跡は標高約230m～250mの丘陵の中にあり、川内川に向かって形成された谷を利用して造られた桑畑にある。隣接地には縦貫道関係で調査が行なわれた山崎A遺跡・山崎B遺跡が存在する。

層位は、Ⅰ層は灰黒色（耕作土）で部分的に二次堆積の痕跡が見られる。Ⅱ層は黒褐色火山灰土、Ⅲ層は赤褐色火山灰土で、3層に細分される。Ⅳ層は青灰色火山灰土を観察した。

遺構は、Ⅲ層上面において大小のピットが約90個検出された。落ち込みはⅡ層（黒褐色土）で、ピット中より青磁・白磁・土師器等が認められる。時期は中世と思われるが、ピットの形、大きさ、深さ等が不統一でまとまりのない状態であり、建物跡を想定できるものではない。

遺物は、Ⅲ層中より縄文時代後期と思われる凹線文土器片、完形の鉢形土器が見られる。又、それに伴うと思われる石鏃、石斧も出土した。Ⅲ層上部よりは成川式系土器、Ⅱ層中よりは、土師器、内黒土師器、須恵器、青磁、白磁等が出土した。

山崎C遺跡においては、遺物の量も少なく、性格は明確に出来ないが、隣接する山崎A・B両遺跡と類似点も見られ、密接な関係にあると思われる。



山 崎 C 遺 跡



## 8. 中尾田遺跡

### 1. 位置

本遺跡は、鹿児島県姶良郡横川町中ノに所在する。

### 2. 環境

遺跡は、栗野岳から王ノ山へ連なる台地の舌状台地の先端にあり、標高は223m～210mである。眼下には、国見岳を源として山々野方面から流れてくる支流と、安良岳を源として山ノ口方面から流れてくる支流が合流した天降川が流れており、この川は、遺跡付近で蛇行しながら東流して、対岸の丘陵部を廻るかたちで南流して牧園町へ流れ、そして、霧島山系や溝辺台地の支流を集めて大河川となり、隼人町・国分市の沖積平野を形成して鹿児島湾に注いでいる。遺跡は、眼下の水田面より約50mにもおよぶ高位にあるため、天降川とその支流によって形成されたわずかな平地に発達した横川町の市街地やその縁辺部を一望できる絶好の場所でもある。

横川町は、かつて山々野金山が栄えた頃には宿場街として繁栄したところでもある。

横川町内の遺跡を概観すると、これまで縄文時代の遺跡4ヶ所、弥生時代の遺跡1ヶ所、古墳～歴史時代の遺跡6ヶ所が、これまで知られている。

### 3. 層位

中尾田遺跡の基本的層序は、表層から基盤層の溶結凝灰岩（阿多火砕流＝Ata）まで10層の土層堆積が確認された。火山灰を主成分とする各層は、整合したかたちで良好な層序であったが、傾斜面や中世の遺構による削平などによって部分的には土層堆積に差異が見られた。

なお、遺跡全体の基本層序を整理すると次のようになる。



遺跡全景（北から）

I層は、耕作土である。暗灰色を呈し、平均15cm~20cmの厚さである。II層は黒色土で、掘り遺構の東側部の周囲で見られ、土師器片を包含する。III層は黄褐色を呈した火山灰層であり、鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰(Ah)に対比される。III層中でもa・b層に分かれて、III a層は、ホヤホヤした茶褐色に近い軟質層で、堆積は約30~40cmと厚い。III b層は、黄褐色の軽石粒(バミス)を含む粘質硬土で、堆積は約5~10cmと薄い。遺物は、III a層に阿高式土器、並木式土器が多量に包含されていた。なお、アカホヤ火山灰層(Ah)は、<sup>14</sup>C年代測定値により、6000年~6500年B.P.の値が得られている。IV層は黒色土層であるが、土層中に黄色軽石が一部で見られるためa・b・c層に細分した。IV a層とIV c層は、黒色土層である。IV b層は、黄色バミス混層で、桜島降下軽石(SzP)層と呼ばれるものである。遺物は、IV a層中に含まれている。V層は淡褐色を呈し、若干粘質をおびている。平均約10cmの厚さである。VI層は、V層と類似するが、色調が暗褐色を呈した腐植土層である。約10cmの厚さで堆積している。遺物は、黒曜石の細石核1点および砕片が出土した。VII層は明黄色土層で、粘質の強い硬質土である。層厚は50cmと厚い。VIII層は灰黄色を呈する水分の多い粘質土で、ヌレシラスとも呼ばれている。粘質土と砂層の互層をなすところもあり、水成層と考えられる。IX層は2層に細分でき、IX a層を水成層として、IX b層を砂礫層とした。区層は、灰白色の火砕流であり、一般にシラスと呼ばれている。この火砕流中には、かなり大きな軽石が含まれている。始良カルデラからの噴出物で、入戸火砕流と呼ばれ、<sup>14</sup>C年代測定によりほぼ2.1万~2.2万年B.P.が得られている。X層は、暗灰白色の溶結した火砕流である。この火砕流は、阿多カルデラの噴出物で、阿多火砕流と呼ばれるものである。<sup>14</sup>C年代測定により3万~4万年B.P.の値が得られている。

### 3. 遺構

縄文時代の遺構は、IV層とIII層に見られた。

①IV層内からは、炉穴と集石が検出された。炉穴は、V層に掘り込んでつくられており3基検出された。炉穴の平面プランは、ほぼ円形をなすが、その中には楕円形を中心として拡張したプランを持つものも見られる。炉穴内には、角礫・焼土・木炭片が見られた。

集石は、10基検出された。そのうち、遺跡中央部において8基が集中して検出されている。集石は、掘り込み内にあるものと平坦面に組まれたものがあり、礫の大きさは大小様々である。集石の形で、花弁形に組まれたものもある。

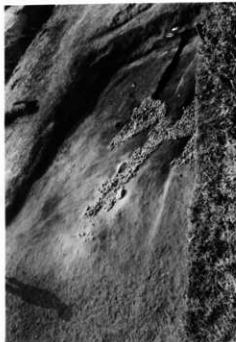
②III層では、炉跡3基、土壇1基が検出された。炉跡はIII a層の下面で焼土を確認し、III b層でプランを検出することができた。平面プランは、隅丸方形をなしている。炉穴内には木炭片が流入している。土壇は、隅丸方形で、III b層からIV層にかけて掘り込んであり、埋土はIII a層が流入している。

③山城関係の遺構は、堀切・陸道・成壁・空堀・土器・盛土・登り道・古道・櫓列・郭・腰曲輪・排水溝・掘立柱建物・土壇が検出された。これらの遺構は、本遺跡の所在する舌状台地を南北に切断する堀切りを中心として東西に見られた。堀切りは最も狭いところで、幅7.5

m、深さ8.2mを測り、広いところでは、幅11.5m、深さ7.4mを測る。堀切りの断面は、逆台形あるいはV字状を呈し、シラス層まで掘り込んで造ってある。南側より隧道付近までは、逆台形を呈しているため、堀切りが防備に加えて通路として利用された可能性がある。隧道は、ほぼ堀切りに対して東側に直角に延びており、天井の一部がアーチ状に残存していた。堀切りからの入口は傾斜して上り一段高くなっている。空掘は、5本検出された。そのうち2本は、堀切りに直行して西側平坦地の中央に並行して築かれていた。他の3本は、いずれも壁面下や傾斜面中腹に築かれたものである。断面は、逆台形をなすものが多い。土塁は、堀切り東側の側辺部に造成盛土面が一部上面が削平されて残存していた。盛土は、遺跡の西側中央部にあり、シラスと黄褐色土（アカホヤ）混りのものが盛土造成されていた。登り道は、西側平坦地の南傾斜面に4本検出された。柵列は、堀切りの西側に3つ検出された。柵列は、堀切りに対して、鋭角的に作られていた。柱穴は2列に並ぶものと、1列のものが見られた。柱穴の大きさは、55cm～65cm大の円形をなしている。深さは浅いもので12cm、深いもので35cmを測る。柱穴間は約2m前後である。掘立柱建物跡は、8棟検出された。掘切りより東側に5棟、西側に3棟である。建物跡は、用地外に延びて、全容をつかむことのできない棟が多かった。梁間柱間および桁間柱間の平均は2m前後である。また、底の付く棟がほとんどである。土城は、6基検出された。平面プランは、方形・円形をなしている。深さは65cm～115cmとわりに深い。玉砂利敷遺構は、郭内のほぼ中央部にあったもので、不定形な敷きかたをしているが、上から見るとあたたかも動物を形どっているかのように見える。玉砂利は、1cm～4cm位のものである。



隧道断面（北から）



建物跡玉砂利敷遺構（東から）

#### 4. 遺物

遺物は、先土器時代、縄文時代、古墳時代、中世期のものがある。特に、縄文時代の遺物は調査中。包含層の性格を知るために、各土器形式ごとの平面分布、垂直分布を示し、各土器形式の出土状況に注意を払った。このことは、土器の原位置をつかみ、各土器形式や同一個体がどのような分布をしているかによって、土器包含層の形成状況を見るためであった。

Ⅳ層の土器は、貝殻文系、燃糸文、縄文系、押型文系、その他の土器と大きく4つに区別される。貝殻文系土器は、口縁外面に貝殻縁で連続刺突を施すものや器面に条痕を施すものである。燃糸文・縄文系土器は、器面に燃糸文や縄文を施し円筒形である。押型文土器は、山形、楕円、菱形、同心円文などの各種押型施文を有するものである。器形は、口縁部が大きく外反し、胴部が「く」の字に屈曲するものである。その他のものとしては、みみずばれと呼ばれる微隆起突帯文・凹線文・櫛歯状の沈線文・円文が見られた。石器は、石鏃30点、石匙7点、石斧3点、磨石5点、凹石1点、石弾状礫1点が出土している。

Ⅲ層の土器は、縄文中期の凹線文土器を中心とするもので、遺跡の南側半分に多く分布が見られた。出土した土器は凹線文土器、凹線文の間に連点もしくは貝殻腹縁押圧の文様を持つもの、口縁部が肥厚してその部分にヘラや貝殻腹縁で施文したものが見られ、中には文様のないもの、胎土に滑石を多く含んでいるものも見られた。また、同層から晩期の黒色磨研土器も出土した。石器は、石鏃68点、石匙2点、石斧7点で、いずれも局部磨製か磨製である。磨石9点、敲石3点、凹石2点、安山岩製の石皿が5点出土しているが、石鏃が68点とⅣ層に比べ、数が多く注目される。

山城に伴う遺物は種々出土しているが、遺構の規模に比較すると小量といえる。出土遺物は、磁器（青磁・白磁）土器・陶器・瓦器・石製品・金銅製装飾品・古銭などがある。いずれも表層中や山城遺構内流入土中の出土であった。白磁は、碗・皿など4点出土し、時期的には、13世紀～15世紀前半の明代に比定される。青磁は、青磁描文皿・鎗蓮弁文碗等で、総数48点出土し、時期は12世紀～15世紀のものである。備前焼・常滑焼の甕も出土している。古銭は、淳化元寶・至道元寶の2枚が出土している。

#### 5. むすび

中尾田遺跡は、基盤層まで10層に区別され、その間に火山灰層と文化層が挟まれる良好な層序が確認された。そのうち縄文文化層は、Ⅳ層とⅢa層に確認された。また、Ⅵ層の黒色腐植土層中に旧石器文化の存在が想定されたが、黒曜石のチップが数点出土するにとどまった。

山城調査は、縄文時代の調査に先だっておこなったものであり、縦貫道用地全域に中世山城に伴う遺構・遺物が検出された。掘切りを中心にその周辺の調査であり、城全体からみると一部の区域にあたるが、多くの構築遺構が判明したことにより中世山城の構築形態を知る重要な手がかりを得ることができた。このように、この台地はいくつもの文化層が存在しており、長い間、各時代の生活の場として活用されたことをものがたっている。このことは、台地を中心とし、この一帯が生活する条件を当時かねそなえた環境であったと言える。

## 9. 木佐貫原遺跡

木佐貫原遺跡は、鹿児島県姶良郡溝辺町木佐貫木佐貫原に所在し、鹿児島空港の北西約5kmの地にあり、霧島連山を一望できる標高約300mの台地上にある。

遺跡は、平坦な台地縁辺部にあたり、ゆるやかな稜をなし、谷頭が形成されているところである。水の便は良いとはいえず、周囲はすべて畑地として利用されている。

土層は、Ⅰ層が表土で耕作土、Ⅱ層がⅡa層の黒色火山灰土とⅡb層の暗褐色粘質土、Ⅲ層がⅢa層の黄褐色砂質土とⅢb層の黄褐色粘質土、Ⅳ層が黄褐色パミス層でⅢ・Ⅳ層は赤ホヤに比定される。Ⅴ層がⅤa層の青灰色土層とⅤb層の乳白色土、Ⅵ層が黒色土、Ⅶ層が黄褐色パミス土で、Ⅶ層は桜島が噴出源とされている。Ⅷ層が黒色土、Ⅸ層が茶褐色粘質土、Ⅹ層が暗茶褐色粘質土、Ⅺ層が黄褐色混礫土、Ⅻ層がシラスとなっている。

遺構は、Ⅲa層に掘り込まれ、Ⅱ層が覆土の溝状遺構が4本、Ⅲa層に掘り込まれ、Ⅲa層が覆土の土壇が2基、Ⅲb層に掘り込まれ、Ⅲa層が覆土の竈穴が3基検出された。

遺物は、Ⅱb層から土師器・須恵器が、Ⅲa・Ⅲb層から縄文時代後期の西平系統・市来式土器・指宿式土器・出水式土器・岩崎上層式土器・縄文土器が、Ⅴ層から縄文時代前期の塞ノ神式土器・手向山式土器・押型文土器・貝殻条痕文土器等が出土している。これらのうち、Ⅲ層出土のものの中には、器壁に絵柄・線刻のある土器も出土している。

石器では、Ⅲ層から打製石鏃、磨製石斧、石匙等が、Ⅴ層から打製石鏃、磨石、凹石、石匙等が出土しており、打製石鏃の出土数が多かった。

遺跡は、土壇や竈穴等が検出されているものの、遺物は散布状況であった。



木佐貫原遺跡遠景

## 10. 石 峰 遺 跡

### 1. 位置及び環境

本遺跡は、満辺町石峰にある。鹿兒島空港の所在する十三塚原台地は、標高200m～280mをなし、満辺町北原から東南方向半人町境まで、さらに西南へ糸走、崎森と加治木町境に至り、西方は弧状となって崎森川の渓谷を望む約20kmにおよぶ広大なシラス台地である。遺跡は、台地のほぼ北端、三角形台地の西側縁辺部にあり、崎森川の源となる狭少な谷水田を望む崖端部にある。昭和41年に河口貞徳氏によって調査が行われ、器面に楕円押型文と変形捺糸文の二つの文様を施した土器「石峰式」(早期)が出土している。

### 2. 層 位

I層は褐色表土層、II層は黒色火山灰層(下位に土師器包含)、III a層は橙色軟質土—アカホヤー(縄文前・中・後・晩期の土器包含)中位出土の木炭によるC—14測定、3050±95 YBP (2960±99 YBP)、III b層は黄色バミス層、IV a層は黝灰青色硬質土層(平楕式土器包含)C—14測定、7910±115 YBP (7680±110 YBP)、IV b層は黒色粘質土(上部に縄文式土器包含) V a層は黄褐色バミス土層、C—14測定、9410±140 YBP (9150±135 YBP)、V b層は黒色粘質土、VI層は茶褐色粘質土(V b層下位からVI層にかけて細石器包含)、VII層は黄褐色粘質土(シラス)。

### 3. 遺 構

縄文時代・竪穴住居跡—IV b層中に掘り込まれ、IV a層が埋土となっている。長径3.84m、短径3.59mの円形で深さ15cm、中心部に長径1m、短径0.8m、深さ22cmの楕円形の炉を設けている。・集石遺構—拳大の安山岩の角礫を集めたものである。33基を確認した。・土壇—平面楕円形をなす落ち込み5基を確認した。これらのうち3基は細石器時代の可能性がある。他の2基は押型文土器を伴出した。

弥生時代以降・溝状遺構とピット群、周辺に土師式土器が多く出土した。・集石遺構—溝内に小児頭大の安山岩の角礫や軽石を寄せ集めたもの、陶磁器伴出。・土壇、III a層中に掘り込まれたもので4基を確認した。・近世墓、円形6基を検出する。寛永通宝、木製数珠玉出土。

### 4. 遺 物

縄文式土器を主体として多くの遺物が出土した。そのほとんどは崖端部に集中している。以下列記する。・縄文式土器—連点鋸歯文、石坂式、吉田式、円筒形条痕文、捺糸文、凸帯捺糸文、押型文土器(楕円・山形・菱形)細形格子状押型文、網目文、石峰式、手向山式、平楕式、塞ノ神A・B式、轟式、曾畑式、深浦式、春日式、阿高式、岩崎上層式、草野式、黒川式等弥生式土器・弥生系土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器—細石刃、細石刃核、ブランク、スクレイパー、剥片、石鏃、石匙、削器、石斧、すり石、叩石、礫器等・鉄鏃

### 5. む す び

平楕式土器を中心として、縄文早・前期の各種の土器型式が多くみられ、特に縄文を有する

土器文化の系統が明らかになったことは重要である。また、細石器に共伴した石鏃・打製石斧、土器片も、今後の研究課題として貴重な資料となろう。



石 峰 遺 跡 調 査 風 景 (東 南 从 ち)



豎 穴 住 居 址

## 11. 柳ヶ迫遺跡

本遺跡は、始良郡溝辺町柳ヶ迫にあり、鹿児島空港と高屋山陵のほぼなかに位置する約2000㎡の台地上にふくまれていた。遺跡内の層位は第8層まで確認することができ、この8層がシラス層であった。この遺跡から出土した遺物は少量であったが、古墳時代・縄文時代・先土器時代の各時代の遺物の変化の様相を層位的によく観察できた。なかでも、先土器時代の遺物は、総数45点の出土量で全て黒曜石を用いている。出土品は、残核・剝片(大・小)・碎片がそのほとんどを占め、スクレイパー様石器が1点、細石刃核ないしはブランク状の石器が1点である。これらのことから、本遺跡は、最も小さなまとまり(単位)として、タイプツール(完成された石器・製品)を欠いた状態での発見であったとされている。



柳ヶ迫遺跡



## 12. 長ヶ原遺跡

長ヶ原遺跡は、始良郡溝辺町大字麓字長ヶ原に所在する。鹿児島空港ターミナルより西北へ約500mに位置する。標高約270mの火山灰台地の縁辺部で、西南部に南方から入り込んでいる谷を控える。その谷と台地面の比高は約20mを測る。

層位は、Ⅰ層は灰黒色(耕作土)、Ⅱ層は黄褐色火山灰土、Ⅲ層は青灰色火山灰土、Ⅳ層は黒褐色火山灰土、Ⅴ層は黄褐色バミス、Ⅵ層は暗茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅶ層は明茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅷ層はシラス質の8層が観察される。

遺構はⅦ層面において、径約1.2m、深さ約0.7mの略円形の落ち込みが検出されるが、遺物等は見られず、性格は不明である。同一層より旧石器時代の遺物が出土しているため、それに伴うものと思われる。

遺物は、Ⅳ層より、細石核・細石刃・たたき石等・旧石器時代の石器が見られた。なかでもたたき石3点とやや扁平な石1点とが、近接した状態で出土しており、石器製作をうかがわせる。Ⅲ層及びⅣ層上面は縄文時代早期の包含層で、土器は前平式土器、貝殻を施文具とする桶形状の文様を持つ円筒形土器(桑の丸遺跡出土のものと類似)が見られる。石器には、石鏃、スクレイパー、異形石器、すり石等が見られる。Ⅱ層上面よりは、古墳時代の成川式系の土器が見られ、甕・壺等の破片が出土する。



たたき石等出土状態



細石核

細石刃

### 13. 松木原遺跡 14. 葛根塚遺跡

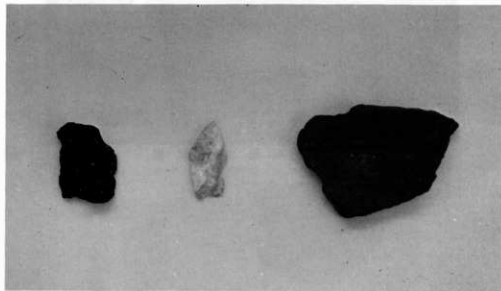
松木原遺跡・葛根塚遺跡は、農道をはさんで相接しているため、ここでは合わせて記すことにする。

遺跡は、始良郡溝辺町大字麓字松木原・葛根塚に所在する。ここは溝辺町の東北部にあたり、鹿児島空港ターミナルより西方約400mに位置する。標高約270mの火山灰台地で、ほぼ平坦であるが、東南部に谷が入り込んでいるため東南方向へゆるやかな傾斜をなしている。

層位は、Ⅰ層は、灰黒色土(耕作土)、Ⅱ層は黄褐色火山灰土、Ⅲ層は青灰色火山灰土、Ⅳ層は黒褐色火山灰土、Ⅴ層は黄褐色バミス、Ⅵ層は暗茶褐色粘質(ローム質)、Ⅶ層は明茶褐色粘質(ローム質)、Ⅷ層はシラス質の8層を観察する。

松木原遺跡・葛根塚遺跡は、共に畑地構造改善事業のため、広範囲にわたり上層部は削除されており、縄文時代以後の包含層は認められなかった。ただし、松木原遺跡においては、Ⅵ層中より黒曜石片が一点出土しており、旧石器時代の存在をうかがわせる。葛根塚遺跡は、Ⅰ層中より、縄文時代後期の土器片、石鏃、古墳時代の成川式系の土器片が認められた。

以上のように、松木原遺跡・葛根塚遺跡においては包含層がほとんど認められず、特筆すべきものがない状態である。



出 土 遺 物

## 15. 七 次 遺 跡

七次遺跡は、始良郡満辺町麓七次に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの西約300mの位置にある。

ここは十三塚原という標高200m～300mの台地上にある。十三塚原の台地は満辺町と隼人町の行政区画にあり南北12km、東西6kmと台地である。この台地はシラス台地で南九州特有のものである。始良カルデラより噴出した火砕流で入戸火砕流と呼ばれ、今から20,000—22,000年前の年代があたえられている。この台地の東側は嘉例川、西側は日本山川があり、これらの支流が熊手状に台地を浸食し大小の谷を形成している。そのため各地に舌状台地や棚田があり、小さな集落が点々としている。

遺跡は玉利と鍋の集落の中間にあり、陵南小学校の東側を走る谷頭の北にあたる。遺跡の標高は270mで平坦な所である。南側は松ヶ迫遺跡の谷頭部分にあたる。

遺構は径1m前後、深さ10cm～15cmの土塚が11基検出された。この土塚には炭や煙土がはいっているが、時期・性格は不明である。

層位はⅠ層が表層、Ⅱ層が黒色火山灰土層で腐植土、Ⅲ層が黄褐色土層でa・b・cと3枚に分けられ、アカホヤ火山灰土層に比定される。Ⅳ層は灰褐色を呈したローム層である。Ⅴ層は黒褐色のローム層である。Ⅵ層は黄褐色軽石火山灰土層で桜島噴出物の火山灰層である。Ⅶ層は暗茶褐色の腐植土層である。

遺物は縄文後期の指宿式土器・西平式土器・縄文晩期の晩期Ⅱ式と打製石鏃・磨石・削器・くぼみ石、そして古墳時代の成川式土器が出土した。出土層としては縄文時代のものがⅢa層に、古墳時代のものがⅦ層下部からⅢ層の上面にある。



七 次 遺 跡

## 16. 松ヶ迫遺跡

松ヶ迫遺跡は、始良郡溝辺町麓松ヶ迫に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの西約300mの位置にある。

十三塚原という標高200m～280mの台地に立地している。この台地は単人町と溝辺町に分かれ南北12km、東西6kmの広い台地である。北方には、霧島連山、南方には桜島を望む台地である。

この台地はシラス台地とよばれ始良カルデラの噴出物である。水には非常に弱くすぐ浸蝕される性質があり、川の部分は深い谷となっている。台地の東側には天降川、西側には日本山川があり、これらにそそぐ支流が台地を熊手状に浸蝕している。天降川の支流嘉例川には国鉄肥薩線が南北に通っている。日本山川の支流には小さな集落が点々とあり、狭い湿地帯には棚田がいとなまれている。

遺跡は日本山川の支流の谷頭部にあたり、南を向いた傾斜面である。標高は265mで西側の台地には松林がみられる。七次遺跡と同台地にあたり、木屋原遺跡の対向地である。

I層は耕作土、II層は黒色土、III層は黄褐色土、IV層は灰褐色土、V層は黒褐色土、VI層は黄褐色土、VII層は暗赤褐色土、VIII層はシラスとなっている。ここは谷頭のため東西は弓状になっており、中央部は非常に厚い。土の流れ込みが強く、III層だけがめだつ。

遺物は古墳時代の成川式土器と石鏡が発見された。包含層はIII層であった。



松ヶ迫遺跡

## 17. 木屋原遺跡

木屋原遺跡は、始良郡溝辺町麓木屋原に所在し、鹿児島空港ターミナルビルより約300m西にある。

遺跡は十三塚原という標高200m～280mの台地上にある。この台地は行政区画上で溝辺町と準人町に分かれている。この台地は南北12km、東西6kmでほぼ三角形をしている。この台地の性格はシラス台地とよばれる南九州特有のもので、地質学的には始良カルデラより噴出した入戸火砕流という火山灰が基盤となっている。

遺跡は論地部落の北にあり、その北東側には深さ15mの谷がある。谷は遺跡付近で北と東に分かれ北側の谷はゆるやかな傾斜をし、東側の谷頭は急である。遺跡は標高267m～268mの台地上で谷部に行くにしたがって傾斜している。また、北側には鹿児島空港が建設されている。

層位は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が黄褐色土、Ⅳ層が灰褐色土、Ⅴ層が黒褐色土、Ⅵ層が黄褐色軽石層、Ⅶ層が暗茶褐色土、Ⅷ層がシラス層となっている。Ⅲ層がアカホヤ火山灰で、Ⅳ層が薩摩火山灰である。

遺構は、Ⅵ層に直径10cm前後の石を20数個集めた集石遺構が2基検出された。遺物はⅤ層に前平式土器、Ⅳ層に石板式土器、Ⅳ層上部に形式不明の貼り付け突帯付きの条痕文土器等が出土し、縄文時代の早・前期にあたる。また、石器としては石鏃が出土した。古墳時代の遺物としては成川式土器と須恵器が出土した。



木 屋 原 遺 跡

## 18. 山 神 遺 跡

山神遺跡は、始良郡溝辺町麓論地に所在し、鹿児島空港の約1200mの南に位置する。

溝辺台地は標高200～280mで、始良カルデラの北壁に連なるシラス台地である。東側は天降川により霧島山塊、西側は網掛川により蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20kmをこえる平坦面は十三塚原と称される地である。遺跡は、鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔256～258mの平坦な台地上の茶畑地帯である。

層位は、Ⅰ～Ⅴ層に分類され、Ⅰ層は黒ボクと黒ニガの2層に分かれる。黒ニガより土師器等が出土する。Ⅱ層は赤ホヤ層で縄文前期～後期の遺物が出土する。Ⅲ層（黒褐色粘質土）から縄文前期の貝殻条痕文土器が出土した。Ⅳ層は黄橙色含軽石層で無遺物層である。Ⅴ層は暗黒褐色粘質土で他の遺跡では細石器が包含されるが、本遺跡では確認しえなかった。

遺構は、溝状遺構・焼土・掘立柱建物跡・ピット群・集石が検出された。掘立柱建物跡は、2間×2間、2間×3間である。

遺物は、縄文式土器・石器・土製品・土師器・須恵器・青磁が出土している。縄文式土器は凹線文・岩崎下層式・市来式・貝殻条痕文・摺糸文・ヘラ沈線文等が出土している。石器には石匙・磨石・凹石・剝片・石鏃があり、土製品は土唾が5点出土している。土師器は、壺形土器・鉢形土器・坏が出土し、坏には墨書土器がある。須恵器は破片のみであるが壺が主をしめている。青磁は高台付碗の底部の破片である。



遺 跡 近 景 (南東から)

## 19. 曲 迫 遺 跡

曲迫遺跡は、始良郡満辺町大字麓字曲迫に所在し、鹿児島空港ターミナルビルの南約 1,000 m の位置にある。

遺跡は標高 267 m のシラス台地に立地し、鹿児島空港の東南端から約 250 m 南に位置する。曲迫遺跡付近の地形は、満辺台地の東側を流れる天降川にそそぐ小川があり、その小川の上流が遺跡近くまできている。遺跡は、その谷頭が円弧状にめぐりその中央部の台地にあたる。中央部の台地はこの付近で最も高く、「ケンツケ山」(闘鶏山) と呼ばれる小高い所である。周囲は茶畑であり、谷には杉・桧が植林されている。

近くの遺跡としては、木屋原遺跡・山神遺跡・杵場遺跡・西免遺跡等がある。

本遺跡の地層は、Ⅰ層が表土、Ⅱ層が黒色火山灰層(腐植土)、Ⅲ層が黄褐色火山灰層で通称アカホヤと呼ばれる層。上部は軟質で下部は若干硬質である。Ⅳ層は赤褐色軽石質火山灰土層でブロック状にみられる。Ⅴ層は灰褐色火山灰土層で、下部に至っては黒褐色を帯びてくる。Ⅵ層は黒褐色火山灰土層で、上部は灰褐色を帯びる。Ⅶ層は黄褐色軽石質火山灰土層である。Ⅷ層は茶褐色火山灰土層で腐植土である。Ⅸ層はシラス層である。Ⅲ・Ⅳ層が鬼界カルデラ噴出物のアカホヤ火山灰で、Ⅷ層が桜島噴出物の薩摩火山灰。Ⅸ層が始良カルデラ噴出物の入戸火砕流にあたる。

遺物はⅢ層に縄文後期初頭の岩崎上層式と石鏃・石匙が出土し、Ⅱ層にも石鏃がみられた。他に表層直下に成川式土器や内黒土師器が出土した。



曲 迫 遺 跡

## 20. 杵 場 遺 跡

杵場遺跡は、始良郡満辺町麓杵場に所在し、現在の満辺インターチェンジの場所である。

満辺台地は標高200～280mの始良カルデラの北壁に連なるシラス台地である。東側は天降川により霧島山塊、西側は網掛川により蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20㎡をこえる平坦面は十三塚原と称される地である。遺跡は、鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔256～258mの平坦な台地上の茶畑地帯で山神遺跡の南側に立地する。

層位は、Ⅰ～Ⅵ層に分類され、Ⅰ層は耕作土で黒色火山灰土層、Ⅱ層は黄褐色土層で通称赤ホヤと呼ばれるものである。遺物は縄文時代中期～後期のものが出土し、最上部からは成川式土器が出土した。Ⅲ層は黒褐色粘質土層で上部に縄文時代前期の塞ノ神式土器が出土した。Ⅳ層は黄橙色含軽石層で無遺物層である。Ⅴ層は暗黒褐色粘質土で他の遺跡では細石器文化の遺物が包含されるが本遺跡では確認し得なかった。Ⅵ層は茶褐色火山灰層で基盤であるシラスの上にあり、遺物は見られなかった。

遺構は検出出来なかった。

遺物は縄文式土器・成川式土器・石器が出土している。縄文式土器は、岩崎下層式・凹線文土器・指宿式と塞ノ神B式が出土している。石器は、磨製石斧・石鎌が出土し、土錘も出土している。成川式土器は、壺形土器と壺形土器が出土している。壺形土器は完形品が1点、壺形土器は口縁部を除きほぼ完形に復元できたものが1点出土している。



遺 跡 近 景 (南から)



## 21. 西 免 遺 跡

西免遺跡は、鹿児島県姶良郡隼人町西光寺字西免に所在し、鹿児島空港の南約1.5kmのところであり、十三塚原台地が東・東南方向に傾斜はじめる台地の縁辺部にある。周辺はすべて畑地として利用されており、茶の栽培が盛んである。

土層は、Ⅰ層が表土で黒色火山灰土、Ⅱ層がⅡa層の黄褐色土とⅡb層の黄褐色バミス土である。Ⅱ層は赤ホヤ火山灰土に比定されるものである。Ⅲ層が黒褐色粘結質土、Ⅳ層が黄褐色含軽石土、Ⅴ層が暗黒褐色粘質土である。Ⅵ層は桜島が噴出源とされている。

遺物は、Ⅱ層の最上部から古墳時代に属する成川式土器の変形土器・壺形土器が少量出土した。石器は出土しなかったが、Ⅴ層から黒曜石片5点、玉髄片1点を出土し、旧石器のローム層としてとらえる発端となった。

遺跡は、機械力による大規模な開墾等がなされており、遺構・遺物等皆無の状況であった。



西 免 遺 跡

## 22. 中 尾 遺 跡

本遺跡は単人町西光寺中尾にある。十三塚原の台地を横断し、西北から東南に県道論地一糸走線が走るが、その中央部から南西方向へ農道を約500mたどった地点である。遺跡は北側を南西方向に走る農道でくざられている。この農道は標高264m線にそっており、ここから北方へはほぼ平坦な台地をなしており、鹿児島空港を遠望できるが、南方へは5～6mの比高差で急に下がり、あとやや低平となる。

層位はⅧ層まで確認した。Ⅰ層は黒色火山灰層、Ⅱ層は褐色粘質層で下位に土師式土器を出土した。Ⅲa層は黄褐色（軟質土）上部に成川式土器出土、Ⅲb層は黄色（硬質土）上部には縄文後期土器出土、Ⅲc層は黄褐色パミス層、Ⅳ層は黒色粘質層、Ⅴ層は黄褐色パミス層、Ⅵ層は黒褐色粘質ローム層、Ⅶ層はシラス層。

遺構として焼土面とピットがみられた。焼土面は長径12m、短径5～6mと不定形をなす。Ⅲa層内に約10cm入ったところで、灰層10cm、下位に赤褐色の固い土が1～2cm重なる。焼土面内外に成川式土器の小片が少量と須恵器片1点が発見された。ピットはA・B共に直径約50cmの略円形、深さ80cmで、周辺部の土が赤褐色に焼けて固く、また木炭片やその粒子が散在していた。

遺物は成川式土器が多く出土した。縄文式土器は条痕文・ヘラ描沈線文などが少量出土した。須恵器片、内黒土師器の碗、環、把手等もみられた。石器として石斧、打製石鏃、磨製石鏃などがある。

なお、成川式土器の出土状況から、同一期と思われるピットA・Bの焼土による放射性炭素年代測定結果によると、ピットAでAD 500、ピットBでAD 620と出ており、成川式土器の下限の問題に貴重な資料となった。



中 尾 遺 跡

## 23. 入 道 遺 跡

入道遺跡は、鹿児島県始良郡華人町西光寺入道に所在し、鹿児島空港の南約3km、南十三塚原台地が南へ緩傾斜していく標高約260mのところに所在する。

周囲は、ほとんどが畑地として利用されており、水田は台地縁辺部の開削された谷等にわずかに存在するだけである。

土層は、Ⅰ層が表土で旧耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰土層、Ⅲ層は上部（Ⅲa層）が褐色土層、下部（Ⅲb層）は黄褐色土層、最下部（Ⅲc層）には黄橙色のバミスがブロック状にみられる。このⅢ層は赤ホヤ火山灰層に対比されるものである。Ⅳ層は黒褐色粘質土層、Ⅴ層は黄橙色含軽石層で、Ⅴ層は桜島に噴出源を求められるものである。Ⅵ層は暗茶褐色粘質土、Ⅶ層が茶褐色粘質土、Ⅷ層が暗茶褐色粘質土、Ⅸ層が黄褐色シラス土である。

遺構は、溝状遺構が5本、古道跡と考えられるもの5本、ピット群が検出された。このうち溝状遺構と古道跡と考えられるものはⅢ層に掘り込まれ、覆土はⅡ層であった。耕作等により保存状況が必ずしも良いとはいえず、その性格等を把握するまでは至らなかった。ピット群も建物跡として確認することができなかった。

遺物は、Ⅲa層から、当遺跡での主体をなす成川式土器片が散布状態で出土した。甕形土器、壺形土器、高坏等の他、須恵器の匙を模したと思われる丹塗りの土師器の匙が出土した。

その他、Ⅲb層から縄文時代後期の底部と考えられる底部片が数点出土しているが、石器等は出土しなかった。



入 道 遺 跡

## 24. 南十三塚遺跡

本遺跡は溝辺町崎森南十三塚にある。東方は単人町に接する。南は東西方向に走る県道崎森単人線が、立岩部落で南走する。北方に展開する十三塚原台地は、波状を呈しながら南方へ緩傾斜する。遺跡は、その南端部に当たり、標高約240mである。北東から南西へなだらかなスロープをなし、西方30mで浅い道を北から南へ形成する。

層位はⅠ層～Ⅺ層まで確認した。西方A・B区ではこの上にさらに二次的な流土が厚く堆積していた。Ⅰ層は黒色火山灰層、Ⅱ層は黄褐色土層（アカホヤ）上部は軟質で下部は硬質である。Ⅲ層は黝黒色粘質土層で縄文早・前期の包含層と思われるが、遺物の出土はなかった。Ⅳ層は黄褐色パミス層、Ⅴ層は黒褐色粘質層、Ⅵ層は褐色シラス層、Ⅶ層は砂礫層、Ⅷ層はピンクシラス層。

遺構は確認されなかったが、遺物は少量出土した。いずれも小片であり、地表面ないしⅠ層中に出土した。平椀式土器片1、貝殻腹縁部による刺突文土器1、他に成川式土器である。

1. 現地形は北東から南西になだらかなスロープをなして傾斜しているが、本来は急傾斜をなし、西方は細く浅い谷部となっていたと思われる。
2. A・B区は1.5～2mの厚さの埋土が見られ、また、東方E～I区は深く削平がみられる。昭和39年の土地改良事業等によって、地面の平坦化が行われている。
3. 包含層と推定される層は、ほとんど消滅ないし攪乱を受けていたが、縄文式土器・成川式土器が少量発見されており、近くに遺跡の主体部の残存する可能性もある。



南十三塚遺跡

## 25. 東 原 遺 跡

東原遺跡は給良郡溝辺町崎森東原に所在し、県道崎森・華人線の立岩バス停より南に約100mの位置にある。

遺跡は、十三塚原という標高200～280mの台地の西南端部に立地している。十三塚原の台地はシラス台地で南九州特有の台地である。このシラスは今より20,000～22,000年前の給良カルデラ形成時に噴出した入戸火砕流である。シラスは水に弱く各地に浸蝕崖を形成している。浸蝕崖の下には小川が流れ水田のあるところもある。小川は浸蝕・蛇行しながらシラス台地を舌状にしている。東原遺跡は北側と南側に谷がみられる舌状台地に立地している。

東原遺跡の附近は北に立岩、南に桑ノ丸という集落があり、東側は広大なシラス台地となり、遺跡は標高215m～235mの高さにある。

土層は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が黒色火山灰層、Ⅲ層が黄褐色火山灰層、Ⅳ層が灰褐色粘質火山灰層、Ⅴ層が黒褐色粘質火山灰層、Ⅵ層が軽石層、Ⅶ層が極暗赤褐色粘質火山灰層、Ⅷ層がシラス層となっている。(Ⅲ層がアカホヤ火山灰、Ⅳ層が薩摩火山灰である)

遺構としては住居址が1基、Ⅲ層中に検出された。その規模は4.5m×4.9mの略正方形に近い竪穴住居で壁面は深いところで約30cm浅いところで約10cmである。この住居址の主柱は6本で他に補助柱が数本みられる。中央部は浅く広くくぼみ、お床や煤がみられた。また南隅には185cm×85cm—98cmの台形で深さ40cm—50cmの掘り方が検出された。この住居址の遺物は成川式土器で甕形土器、壺形土器、高坏形土器、小形丸底土器、鉢形土器が出土し、古式土器の時期のものであろう。

遺物としては、Ⅲ層中より成川式土器や縄文晩期・中期、Ⅳ層下部に縄文早期の石版式土器が出土した。Ⅴ層には縄文早期の条痕文土器が完形で出土した。石器としては、Ⅳ層とⅤ層に石鏝が三本出土した。



東 原 遺 跡

## 26. 桑ノ丸遺跡

### 1. 位置・環境

桑ノ丸遺跡は、始良郡溝辺町大字崎森字桑ノ丸に所在する。桑ノ丸は溝辺町の南部にあたる。このあたりは台地が火口壁を経て鹿兒島湾に至る地域で、小河川による台地の間折谷が形成されている。そのために台地はえぐられて舌状の台地が谷と交互に位置するといった地形をなしている。

桑ノ丸遺跡は標高約210mの西面する舌状台地にあり、南側を桑ノ丸川、西側を立岩川が流れている。川との比高は約35mを測る。南側はやや緩やかな傾斜であるが、北側は急傾斜となっている。台地の基部はやや平坦となり、西北の十三塚原台地へとつづく。台地面は現在畑となっており、各畑ごとに段があるが以前は平坦であったものと思われる。遺跡の北側約400mには、縦貫道関係で調査され、縄文時代早期、古墳時代の遺構・遺物が確認された東原遺跡が所在する。

### 2. 層位

層位は、Ⅰ層が黒色火山灰土、Ⅱ層が黄褐色火山灰土、Ⅲa層は青灰色火山灰土、Ⅲb層は乳白色火山灰土、Ⅳ層は黒色火山灰土、Ⅴ層は茶褐色粘質土(ローム質)、Ⅵ層はシラスが観察される。また部分的な地層横転が2ヶ所において認められた。

### 3. 遺構

遺構は縄文時代早期のものとして、落ち込みと集石が検出された。落ち込みは径80~90cmで4ヶ所あるが、遺物は認められない。集石は2ヶ所が検出された。Ⅱ層上面においては歴史時代のピット群が検出された。ピットは径15~30cmであるが、不規則で建物跡等を想定出来るものではない。ピット検出面と同じ面で焼土も見られる。又、近世墓66基と、それに伴う古道も検出された。

### 4. 遺物

遺物はⅢb層より縄文時代早期の吉田式土器・前平式土器(桑ノ丸遺跡で最も多く出土したもので、円筒土器・角筒土器とが見られる。)円筒形土器で貝殻状の施文具で柳描き状に沈線文を施すもの、押型土器等が出土する。Ⅲa層より縄文時代前期の平筒式土器、塞ノ神A式土器、塞ノ神B式土器が出土する。Ⅱ層より縄文時代前期の轟式土器、縄文時代中期の阿高式土器、縄文時代後期の指宿式土器、西平式土器、三万田式土器が出土する。Ⅰ層より、古墳時代の成川式系土器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、近世墓に伴う近世陶磁器が出土する。

石器は、縄文時代の石鏃、石匙、スクレイパー、石斧、磨石、凹石、敲石、弥生時代の磨製石鏃等が出土する。石器の中では、吉田式土器、前平式土器に伴って出土する石ケン状磨石が数点出土していることが特徴づけられる。

### 5. むすび

桑ノ丸遺跡においては、縄文時代早期・前期・中期・後期の土器、石器、弥生時代の石器、古

埴時代の土器、奈良・平安時代の土師器等と長期間にわたっての遺物が認められ、生活の場としての条件の良さがうかがわれる。特に縄文時代早期の前平式土器は出土量が多く、貝殻文系の円筒土器・角筒土器の完形品が検出されたこと、貝殻状の施文具により櫛描き状に沈線を施す今まで見られなかった土器群も認められ、縄文時代早期の好資料を提供した遺跡である。



桑ノ丸遺跡



調査風景

## 27. 三代寺遺跡

### 1. 位置

三代寺遺跡は、始良郡加治木町大字日本山字三代寺に所在し、国鉄日豊本線の加治木駅より北へ約1kmのところにある。

### 2. 環境

加治木町の市街地の地にひときわ高くそびえる安山岩で形成された円錐形の「蔵王岳」がある。この蔵王岳の麓に三代寺遺跡がある。

遺跡は標高40mの傾斜面に立地し、遺跡の眼下には日本山川が蛇行しながら南流して錦江湾に注いでいる。また、遺跡は綱掛川や別府川によって形成された沖積地を一望される好位置にある。また、近くには日本山洞窟があり、昭和12年8月に樋口清之・乙益重隆氏らによって調査がおこなわれている。

### 3. 遺構・遺物

遺跡の層位は、Ⅰa層が暗褐色火山灰層、Ⅰb層が灰白色火山灰層、Ⅱa層が黄褐色ローム層、Ⅱb層が軽石層、Ⅲa層が黒褐色ローム層、Ⅲb層が黄褐色ローム様火山灰層、Ⅲc層が軽石層、Ⅳa層が暗黒褐色・チョコレート色ローム層、Ⅳb層が褐色ローム層となっている。その中で文化層はⅠb層とⅢa層である。

遺構としては、Ⅰb層の中世の柱穴群と土坑がⅡa層に検出された。柱穴群は300以上にものぼり、土坑は4基であった。その中で建物と想定されたのは東西3間～5間、南北2間～3間の構築物である。土坑は4基検出され、133cm×70cmの長方形で、深さ20cmの規模のものが定形で、他は不定形の土坑であった。遺物は少なく、埋土中に白磁の小皿1点のみ出土した。

また、Ⅲa層中にも集石遺構5基が出土している。10cm前後の円礫を主体に径40cm～160cmで円形に集めた遺構である。石材は安山岩が多く、そのなかには熱を受けた痕跡が認められるものもある。

遺物は中世から古墳時代のもものと縄文時代のもものが出土している。中世のものは青磁、白磁、土師器、備前焼が出土し、古墳時代のものには須恵器、成川式土器が出土した。

縄文時代の遺物は、晩期と早期が出土している。晩期該当は晩期Ⅰ式の土器が出土した。前期は塞ノ神B式土器、塞ノ神A式土器、早期は桑ノ丸遺跡3類、前平式土器、吉田式土器、石坂式土器、押形文土器や条痕文土器等形式不明の土器が他に少々出土した。

塞ノ神B式土器は本遺跡の中心的な遺物である。器形は口縁部がく字状に外反するものと、口縁部が直口した筒状口縁をもった円筒土器の二形式が見られる。文様は貝殻縁による刺突連続文と沈線文（貝殻文を含む）の組み合わせである。底部は平底をなす。

押型文土器は口縁が外反し、底部は丸底がみられる厚手の土器である。文様は山形押形文と楕円押形文がある。

石器は石鏃、石匙、局部磨製、磨製石斧、槌石、凹石、石皿、黒曜石製の剝片石器が出土し



た。石斧は長さ5cmの小形のものから15cmの大形のものまで13点出土している。石皿は5点出土しているが完形は長さ40cm位のもので1点である。黒曜石製の石器は大形剥片石器をはじめ加工痕のある剥片や使用痕のある剥片、円盤状剥片が出土している。他に剥片や石核、残核は多数出土した。なお、黒曜石は1900点にものぼる量であった。

#### 4. むすび

本遺跡の縄文土器は多種にわたっている。押型文土器や石坂式土器・塞ノ神B式土器がみられるが、中心となる文化は塞ノ神B式土器のものである。塞ノ神B式土器は貝殻文と沈線文で文様は構成され、器形は口縁部が朝顔状に頸部から外反し、底部は平底をなす土器である。本遺跡では今までみられた口縁の外反する土器のほか筒状の円筒土器が出土したことである。

その後、同じ様な塞ノ神B式土器の出土する文化層は加治屋園遺跡にもみられ、加治屋園遺跡では7550±130 YBPの年代が出ている。この様に三代寺遺跡は早期から前期初頭にかけての代表的な遺跡である。



三代寺遺跡

## 28. 建馬場遺跡

建馬場遺跡は、鹿児島県姶良郡加治木町反土建馬場に位置している。遺跡は加治木町の市街地はずれ、網掛川と日本山川とに取り囲まれた標高約12mの台地縁辺部に位置し、東側日本山川寄りを県道栗野・加治木線が走り、さらに日本山の山麓には、冠形の円錐丘を呈した安山岩で形成されている加治木町のシンボル蔵王岳が高くそびえている。西側は網掛川が蛇行して流れ、その流域は広く分布する水田地帯となっているが、最近では町営住宅等の建設に伴い宅地化の波が押し寄せている。北側には本遺跡との比高差が約60m以上の急崖がせまり、舌状台地となり、旧加治木城の跡が所在し、遺跡地より約550mの所に、竜門ノ滝があり、加治木町の名所のひとつに数えられる。南側は市街地を隔てて鹿児島湾となり、網掛川や日本山川が流入する。

土層は本遺跡が沖積平野の一隅に位置し、網掛川や日本山川等の氾濫や水蝕を含めた堆積地のためか砂混りの黄褐色砂層で、その下層は小石、軽石、バミスなどの混在した黄色砂層を呈している。各地区とも何んらかの影響を受けており、遺物包含層をつかむことはできなかった。しかし、第Ⅲ地区の一部で遺物包含層が認められたものの遺物は混在して出土した。

遺物は第Ⅲ地区の一部地区より成川式系土器の甕形土器・壺形土器・高坏・手捏土器、土師器、須恵器、陶磁器（青磁・白磁・近世磁器）などの遺物の混在が認められ、特に成川式系土器を中心とした土器溜まりの状態で大破片が多量に出土した。このようなことから、この台地縁辺に位置する遺跡は、洪水などの氾濫や水蝕により、殆んど滅失しており、僅かに第Ⅲ地区の一部に、その痕跡をとどめているにすぎない。



建馬場遺跡

## 29. 松木田遺跡

松木田遺跡は、鹿児島県姶良郡姶良町鍋倉松木田に所在している。遺跡は姶良町の市街地はずれ、別府川や思川により形成された姶良平野の北東縁辺部を開析する別府川北岸にそった鍋倉の東端近くで、標高約10mの畑地に位置している。遺跡の南側は標高約39.6mの凝灰岩の山を隔てて県道下山田・加治木線が別府川沿いに走り、東部及び北部は標高約50～100mの山間部で加治木町との行政区画区域となっている。西部は標高約50mに及ぶ凝灰岩の山が急崖をなし、その山麓下には、蓬米山天福寺跡や鍋倉洞窟遺跡が知られ、さらに西方は、別府川北岸に所在する集落地となっている。

土層はⅡ層上部まで大幅な削平が見られ、Ⅰ層は灰褐色砂層で耕作土となり、Ⅱ層は黄褐色砂礫層であり、本遺跡の遺物包含層と思われる黒色砂質層はⅡ層の上位層で柱穴の埋土において見られたものの、全域が削平されており包含層は確認されなかった。

遺構は、Ⅱ層黄褐色砂礫層上部にくい込んだ柱穴が検出された。柱穴の埋土は黒色砂質層であり、黄褐色砂礫層まで削平された個所が多いために22個所の柱穴が確認されたが、いずれかの時代のものか判断することは出来なかった。

遺物は、耕作層からの出土がほとんどで、成川式土器・土師器・現代陶器が少数出土し、柱穴と思われる遺構の埋土中より滑石製管玉1点が出土した。



松木田遺跡

## 30. 小瀬戸遺跡

### 1. 位置

小瀬戸遺跡は、鹿児島湾奥の始良郡始良町西餅田字小瀬戸に所在する。この地は国鉄帖佐駅の北西約1kmの地点にあたる。

### 2. 環境

遺跡の所在する始良町は、思川・別府川によって形成された沖積平野が、鹿児島湾に添って約2km幅で開けた平野部と、標高約100m～200mのシラス台地となる山地部からなり、この間に各河川によって形成された開析谷と谷間の平地が、北方にわずかに開ける。

遺跡はシラス台地の通称城山の裾野から南へ突出した標高約11m余の微高地である。この微高地は遺跡のあたりで枝状に西に張り出し、東部を除く三方は比高約1m～2mをもって水田地帯となる。

### 3. 層位

I層は灰褐色を呈し、やや砂質ぎみである。土層は約20cm～40cm内外となり、ほぼ水平に堆積する。II層は黒色を呈し、砂質ぎみである。I層と同様にほぼ水平に堆積し、層の厚きは約20cm～40cmを測る安定した層序を示す。このII層が本遺跡の遺物包含層で、土師器、須恵器、青磁等の遺物が出土する。III層は砂質のシラス土層を基調とするが、バミス、黄褐色土が混りあう地点もみられる。遺構のすべてはこの層の上面で検出された。



小瀬戸遺跡

#### 4. 遺 構

遺構は建物跡、ピット群、溝状遺構、井戸が検出された。建物跡は遺跡の北西部に2間×3間のものが2基復元できた。

ピット群は遺跡全域に検出されたが、建物跡等復元するには至らなかった。ピットは径20cm～40cm、深さ20～50cmを測り、平面形は円形を呈する。ピット中には根石と思われる安山岩質の角礫を置くものも見られた。また、ピット中には土師器、須恵器、瓦片等が埋土とともに出土した。

溝状遺構は15条検出された。このうち東西に走るもの3条、南北に走るもの12条で、圧倒的に南北に走る溝が多い。溝状遺構のうち、東西・南北が交叉するものが2カ所あり新旧が確認できたが、遺跡全体の中での区割り等については明確にできなかった。

溝状遺構は幅20cm～40cm、深さ10cm～50cmを測り、断面U字形を呈する。遺構の性格については、C・D-Ⅳ区に検出された井戸に先端が連結すること、縦断面のレベル観察によると、先端部が遺跡中央にあり、末端はレベルが下りつつ遺跡外へ延びることなどから、排水溝としての機能が考えられる。

井戸は遺跡中央部、北西部に各1基検出された。このうち中央部の井戸には、直径約80cmの広葉樹を平截し、のち内部をくり抜いたもの2枚を合わせ井戸枠としたもの、その中には、くり抜いて作った木製容器1点が出土した。また、埋土中より土師器、須恵器、瓦等とともに、モモ、ウメ、イチイガシ、ヤブニッケイ、ヒョウタンの種子が出土した。

#### 5. 遺 物

遺物はⅡ層を中心に遺跡全体に出土した。遺物は土師器(甕・埴・鉢・坏・甬・蓋)、瓦器質土器、内黒土師器、須恵器、青磁、白磁、緑釉陶器、瓦、土鍾、紡錘車のほか、縄文時代後期及び晩期、弥生中期の土器が少量出土した。土師器(坏・皿)は1点の承切底を除きすべてへう起しであり、「仲家」、「大伴」、「原」、「雄」、「判」等の墨書、刻書土器があり注目される。また、緑釉陶器の底部内には「伴家」と針書されている。

瓦は丸瓦・平瓦の類で、本遺跡の北方約2kmの所に所在する宮田ヶ丘窯跡採集瓦と酷似し、関連がうかがわれる。しかし、瓦の相対量は少なかった。その他の出土遺物として、ピット中に土製土馬が出土したほか、製作技法から肥後地方の須恵器に類似する須恵器類も出土した。

#### 6. むすび

以上のことから本遺跡は奈良時代末期～平安時代にかけての、地方官衙的な要素の強い生活址の遺跡であることが判明したが、当該時代の研究は緒についたばかりで、今後の研究成果に待つところが大きい。

いづれにしても、多量の墨書、刻書土器、緑釉陶器、土馬等の出土は注目されるところであ

## 31. 小 山 遺 跡

### 1. 位 置

小山遺跡は、鹿児島市の北部に隣接する鹿児島郡吉田町東佐多浦字小山に所在する。

### 2. 環 境

遺跡の所在する吉田町は約80%が山林の町である。平野は始良町を経て鹿児島湾に注ぐ思川によって形成された小平野が東部、西南部には鹿児島市を経て鹿児島湾に注ぐ稲荷川の上流、流域にわずかな水田地帯が開けるのみである。

このうち小山遺跡の所在するところは、三方を山に囲まれた標高87m～89.5m、幅は広い地点で120m、狭い地点では40mにも満たない谷底平地である。視界は東側にわずかに開けるがこれとても谷底平野部分のみで、これが切れると再び谷川のある山狭となる。

### 3. 層 位

本遺跡の層位は、I層～VI層まで確認した。I層は灰褐色ないし黒褐色を呈し30cm～80cm堆積する。II層は黒色の砂質ぎみで10cm～30cmの厚さで堆積する。III層は橙色および黄褐色を呈し「赤ボッコ」と通称する層である。IV層は青灰色を呈し粘質の土層で40cm～50cm堆積する。V層は黒褐色を呈する粘質の土層で20cm～40cmの堆積を示す。VI層は黄褐色パミス層で本遺跡の基盤層となる。



小 山 遺 跡

#### 4. 遺構

遺構は、縄文時代早期の吉田式土器に伴う集石10基、前期の塞ノ神式土器に伴う集石12基が検出された。早期の集石は拳大を中心にした安山岩礫を使用し、粗な集石である。これに比較して前期の集石は礫数も多く、まとまりの良い集石が多い。

歴史時代では遺跡の西側に礫列、南側にピット群が検出された。

#### 5. 遺物

本遺跡の主体をなす遺物は、Ⅳ層の縄文前期の塞ノ神A a式、塞ノ神A b式。Ⅴ層出土の縄文時代早期の吉田式土器である。

これらのほか、縄文式土器では石坂系土器、円筒形条痕文土器(早期)、縄式土器、深浦式土器、春日式土器(前期)、岩崎上層式土器、指宿式土器(後期)、晩期の土器も出土した。

石器は、石鏃、特殊石器、石匙、スクレイパー、剥片石器、削器、磨石、石皿等が出土した。歴史時代では、土師器(埴、埴、皿)、須恵器、青・白磁、こうがい、台座等の出土をみた。

#### 6. むすび

平地の幅約100mという谷底状の平地に、縄文時代早期から晩期、そして歴史時代と人々の生活は続いた。その間、縄文時代早期と前期は本遺跡が盛行した時期である。

また、多量の遺物の出土にも関わらず、住居址の発見がなかったこと、石斧の出土がなかったことなどから、本遺跡は定住地とは考えにくい。

さらに、歴史時代の遺物の出土は、現在、口伝1つもない当地に、寺院等の存在が考えられることなどが注目される。



縄文時代前期集石群